

◇ 名鉢！

原田峯雲の銅盤研究



日本盆栽作家協会代表幹事

山田登美男

原田峯雲は、一八九八年（明治三一年）東京・荒川区日暮里に生まれ、その父初代原田峯雲から蠟型鑄造の技法を学んだといわれる。

私共、清香園も初代以来三代目釜次郎まで日暮里のすぐ隣り旧根岸小学校の近くに開園しておりました関係で峯雲についてはよく聞いておりましたし、作品も数点残っております。

初代原田峯雲は江戸名越家の釜師名越弥五郎昌春のもとで釜をかける風炉を製作していた職人であった。恐らく明治の変動期にあたって生活にも厳しいものがあつたのであろうか。その子二代峯雲が花器の専門店「かんべや」で働いたところを見れば、その父初代峯雲も蠟型による花器の製作も手がけたことがうかがえるのである。初代峯雲は釜師家より鑄造の割（金属の配合）を伝授され、その子に、銅、しんちゅう、すずの使用方をさらに伝えたものといわれる。

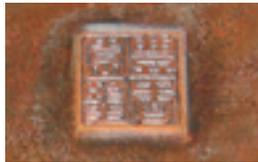
二代原田峯雲はさらに卓越した技量を以て花器専門店「かんべや」の

下職として花器水盤の製作にあつたといわれる。この技量に眼をつけたのが鈴木倉吉豊香園主である。明治末年より盆栽專業となつた鈴木豊香園は、明治初期の水石愛玩が台石または苔植え一辺倒であるのに対し、現在の水石愛好の主流をなす水盤鑑賞を考案した人物で、原田峯雲の水盤製作の原緒を開いたものである。その作品は「豊香鑑」または「豊香撰」の落款として、峯雲鑄として今に残る。

原田峯雲が豊香園の依頼を受けて銅盤製作をした背景に忘れてならないのは、当時の盆栽、水石鑑賞が社会的にきわめて高い位置にあつたということである。豊香園などの業者はあくまでも数奇者の手足であり、しかも今よりずっと美術全般にわたる造詣が深く、愛好家の意を汲んだ水盤製作もそうした愛好家の示唆を受けての発案によるものであつたであろう。水盤の製作にあたる峯雲にしても、茶器や花器を造るのとまっ



筆者所蔵の峯雲作の銅盤にての水石作品。



左：うら面と落款部分を拡大した写真。 上：おもて面。

たく同等の価値を持つ製作品にプラ
イドを以ってそれにあたることがで
きたのである。昭和十四年農業世界
発行の「全日本美術盆栽写真集」に
よれば、二代峯雲は頭初花器類すな
わち薄端を製作したが、これは、華
道の真、行、草を修得する立華^{りっか}のた
めの形態を主眼とし、それから盛花
のための花器水盤に至ったのであ
る。これだけの技量を持つ峯雲にし
てみれば浅物または薄物と彼が称す
る薄手の水盤製作は得意であったと
思われる。それだけに蠟型^{ろうがた}鑄造によ
る一点作品の峯雲水盤は一つも粗漏
のあるものは、あり得ないのである。
峯雲の作品のもう一つの特徴は、
その地肌の美しさである。青銅仕上
げにしても、斑朱銅^{むらしどう}仕上げにしても、
その斑紋の見事さは息を飲むばかり
である。一般には鑄造製品は鑄造家
と仕上げ師は別々の工程で、別の職
人が行うのであるが、峯雲は、その
鑄造、仕上げの工程を、いずれも自
ら行う習慣であったと聞いている。